

言語活動を取り入れた「伝統的な言語文化」の授業づくりの研究

高知大学大学院 総合人間自然科学研究科 教育学専攻 授業実践コース（国語分野）
渡邊春美 研究室
香美市立大柘中学校 教諭 島崎 敦子

1 はじめに

本研究は、平成 26・27 年度の 2 年間にわたる高知県教育委員会の大学院派遣研修の成果である。

26 年度は勤務校を離れ、高知大学大学院で理論を学び、教育現場だけでは知ることの出来なかった多くの研究に触れることができた。自分自身が、九州国語教育学会¹と中国四国教育学会²の二つの学会において、研究論文を発表できたことも大きな成果であった。27 年度は勤務校における授業実践を通して研究を進めた。日々子どもたちとの関わりから授業が構想できたこと、また授業分析や子ども一人ひとりの学びを確かめることができたことなど、勤務校における 2 年目の研修も大変有意義であったと考える。研究の成果を、本県の国語科教育の発展のために役立てることができるように、力を尽くす所存である。

2 研究の目的

(1) 研究の目的

言語の教科である国語科において行なわれる学習活動は、すべて言語活動である。文章を「読む」こと、読んで考えたことを「書く」こと、書いたことを相手に伝わるように「話す」こと、どれも言語活動であるが、本研究における言語活動とは、単元を貫く言語活動である。単元の導入段階において示される、学習の最終目標となる言語活動であり、例えば「本の帯をつくる」「登場人物に手紙を書く」などの活動が考えられる。言語活動を取り入れることによって授業はどう変わるのか。子どもたちの学びは深まるのか。言語活動の効果や、言語活動を取り入れた授業づくりについて考察することは、現職教員として日々の実践に生かすことができる。学校全体で言語活動を仕組み「言葉の力」を育てるためには、国語科を中心に発信していく必要があるとも考えている。

また一方では、平成 20 年 3 月の「中学校学習指導要領」の改訂によって、【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】が新設され、「伝統的な言語文化」の指導が重視されるようになった。今の時代になぜ「伝統的な言語文化」が重視されるようになったのか。指導者として、その経緯や目的を把握することは非常に重要である。小学校においても各学年で「伝統的な言語文化」の学習指導が始まり、中学校に入学してくる子どもたちの中には「枕草子」や「竹取物語」の一部を暗唱する者もいる。もはや中学校で学習する内容に新鮮さを感じないということもありうる。「伝統的な言語文化」の学習は、一つの型にはまり易い。音読、暗唱、現代語訳さえ行なっていれば、指導したような気になってしまう。文法事項の解説に終始する授業は、ますます古典嫌いを生むかもしれない。

そこで本研究では、子どもたちが生き生きと学ぶ、言語活動を取り入れた「伝統的な言語文化」の授業づくりを目指して研究を進める。

(2) 研究の方法

次のような方法で研究していく。

¹ 第 4 回九州国語教育学会 2014 年 9 月 14 日（於：熊本大学教育学部）

発表題目「中学校「伝統的な言語文化」教育の実践の課題—1990 年代以降の「竹取物語」の実践の展開—」

² 中国四国教育学会第 66 回大会 2014 年 11 月 16 日（於：広島大学教育学部）

発表題目「現行中学校教科書における「伝統的な言語文化」教材の考察」

1 理論研究 2 先行実践の研究 3 実験授業による研究

第一章では、『伝統的な言語文化』教育の基本的方向」として、第一節において「伝統的な言語文化」教育について、その現状と課題を考察する。平成16年2月の「文化審議会答申」まで遡って、学習指導要領における「伝統的な言語文化」設置の経緯について調べる。今の時代が「伝統的な言語文化」の学習に求めているものが何であるのかを考察することによって、授業の目指すべき方向が見えてくるのではないかと考える。また第二節では、言語活動を取り入れる意義と、学習者たちが主体的に学ぶ、効果的な言語活動の条件を考察し、第四章の実践における授業の基本方針を示すこととする。研究の方法は主に文献調査による。

第二章では、「中学校『伝統的な言語文化』教育の実践の課題」と題して、言語活動を取り入れた「竹取物語」の実践を比較・分析する。考察の対象を特に「竹取物語」とするのは、どの出版社の教科書にも掲載されており、実践記録が多く発表されているのではないかと考えたからである。また、中学校における最初の「伝統的な言語文化」教材として扱われていることが多く、「伝統的な言語文化」への導入としての「竹取物語」の学習指導がどのように展開されているのか、実践記録を分析することによって、学習者が生き生きと学習し、学びを深めていく授業に共通する要素を明らかにすることができる。研究の方法は、学会誌等で発表された「竹取物語」の先行実践の記録を収集し、その中から言語活動を取り入れた授業実践を分析することとする。

第三章は、「現行中学校教科書における『伝統的な言語文化』教材の考察」と題して考察する。現職教員としては、勤務校において使用する教科書以外の教科書に、どのような「伝統的な言語文化」教材が掲載されているのかを認識する機会は多くない。各出版社の教科書教材を調査し、特に「読む力」を軸に、教材を比較・分析することとする。どのような力をつけることをねらいとしているのかは、「学習の手引き」の設問の意図を分析し、考察する。また、各出版社における同一学年・同一教材を抽出し、同一教材における各出版社のねらいの相違を認識することで、実際の学習指導における発問の仕方にも工夫ができるのではないかと考える。研究の方法は、東京書籍・三省堂・学校図書・教育出版・光村図書の各出版社の、国語教科書の調査・分析による理論研究とする。

第四章は、「中学校『伝統的な言語文化』教育の実践と検証」とする。教科書から各学年一教材を選び、第三章までの考察に基づいて指導案を作成し、実験授業による研究を行なう。教材については「物語」「随筆」「軍記物語」「和歌」「紀行文」などの中から、文章の種類が異なるものを選ぶことにする。また、言語活動についても、生徒の実態や各教科・領域との関わりに応じて選ぶことが、言語活動の可能性を検証する上で適切であると考えている。第四章は実践編として、各学年、各教材の授業実践について分析・考察し、言語活動を取り入れた「伝統的な言語文化」の授業の構造や教材開発がどうあるべきなのか、自分の考えを構築していきたいと考えている。検証するにあたっては、生徒作品や、ワークシート等を材料とする。

第一章から第四章までの考察によって、学習者が生き生きと学ぶことのできる、言語活動を取り入れた「伝統的な言語文化」の授業の構造を明らかにすることは、これからの様々な実践において生かすことのできる柱となる。現職教員の責務として、鋭意、努力するものである。

3 研究内容

(1) 第一章 「伝統的な言語文化」教育の基本的方向

第一節において「伝統的な言語文化」教育について、その現状と課題を考察した。「文化審議会答申」では、古典すなわち「伝統的な言語文化」の果たす役割を、「感性や情緒力を身に付け、豊かな人間性を形成する上で重要である」「言語文化の継承・創造・発展は、社会を維持し、発展させる基盤となる」「言語文化についての理解は、日本人としての自覚や誇りとなり、自己の確立、社会を生き抜く力となる」として3点挙げている。また国語力を構成する能力の一つとして「感じる力」=情緒力を挙げてみている。

そして国語力を身に付けるために、国語の教育を中核に据えた学校教育の必要性を示していることから、学校教育においては趣旨を踏まえ、「伝統的な言語文化」に触れることのできるような国語科授業のあり方を工夫しなければならないと考える。

平成18年2月、中央教育審議会審議経過報告においては、言葉が思考力や感受性を支え、知的活動、感性・情緒、コミュニケーション能力の基盤となることが述べられた。また、国語教育における「伝統的な言語文化」の重視について、①日本人としての自覚、②豊かな人間性の育成、③文化の継承と発展の3点から述べられている。この3点は、「文化審議会答申」が示す「伝統的な言語文化」の果たす役割と重なる。

平成18年12月には教育基本法が、平成19年6月には学校教育法が改正された。これら二法の改正から中央教育審議会答申を経て、学習指導要領に「伝統的な言語文化」を重視する指導のあり方が、具体的に示されるのである。

平成20年1月、中央教育審議会答申は、学習指導要領の「教育内容に関する主な改善事項」として「伝統や文化に関する教育の充実」を挙げ、国語科における「伝統や文化に関する教育の充実」の方向を示した。そして学習指導要領における〔言語文化と国語の特質に関する事項〕の設置を示した。

以上のような経過をたどって、平成20年3月に中学校学習指導要領が改訂された。〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が新設され、「伝統的な言語文化に関する事項」について各学年における指導事項が明記されたのであるが、底流にはこれからの時代が必要とする国語力があり、「豊かな感性や情緒力」「文化の継承と発展」「日本人である自己の確立」という「文化審議会答申」からの流れがある。今の時代が「伝統的な言語文化」の学習に求めているものである。

そのような「伝統的な言語文化」の学習においては、教材と学習者との深い関わりは不可欠である。教材を通して学習者が新たな価値観を獲得したり、自分の生き方や考え方に向き合ったりすることができるのは、やはり言語活動である。第一節の考察からは、授業の目指すべき方向を考えることができた。

第二節では「伝統的な言語文化」教育の基本的方向について考察するために、まず言語活動が重視されるようになった背景を探り、言語活動の意義について述べた。言語活動は、学習のゴールに向かう過程で、学習者の意欲や主体性を引き出すことができる。また、実生活の様々な場面を想定することによって、生きてはたらく「言葉の力」を身に付けることができる。言語活動を取り入れた「伝統的な言語文化」の授業においても同様である。第二節では、言語活動を取り入れる意義と、学習者が主体的に学ぶ、効果的な言語活動の条件を考察することができた。

そして以上の考察から、本研究における言語活動を取り入れた「伝統的な言語文化」の授業の基本構想を、「個別化」「活動化」「共同化」「創造化」「発展化」の5つの要素³によって示し、第四章における「伝統的な言語文化」の授業実践の基本的な方針を持つことができた。

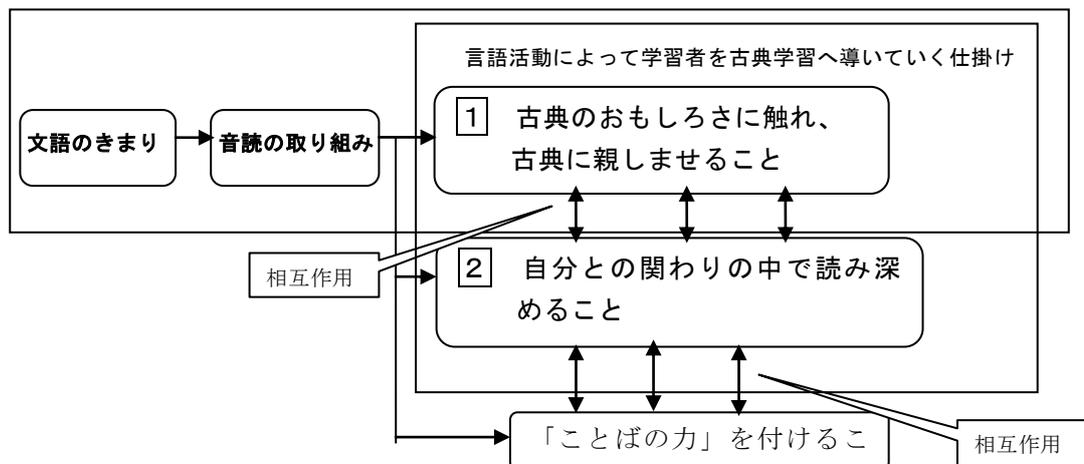
(2) 第二章 中学校「伝統的な言語文化」教育の実践の課題

—1990年代以降の「竹取物語」の実践の展開—

第二章においては言語活動を取り入れた「竹取物語」の実践を比較・分析した。考察の対象を特に「竹取物語」としたのは、どの出版社の教科書にも掲載されており、実践記録が多く発表されていると考えたからである。また、中学校における最初の「伝統的な言語文化」教材として扱われていることが多く、「伝統的な言語文化」への導入としての「竹取物語」の学習指導がどのように展開されているのか、実践記録を分析することによって、学習者が生き生きと学習し、学びを深めていく授業に共通する要素を明らかにすることができると考えた。

³ 渡辺春美編著『小学校国語科 教室熱中！「伝統的な言語文化」の言語活動アイデアBOOK』（明治図書 2012年12月 p8-9）において、学習者が夢中になって取り組む授業の基礎となる要素として示された。

考察は、1985年から2012年までに発表された13本の先行実践の研究によって行なった。いずれも言語活動を取り入れた授業実践である。その中でも特に効果的な学習活動が行なわれていたと考えた3本の実践には、単元の構造に次のような傾向があった。



まず1つ目に、図中①の「古典のおもしろさに触れ、古典に親しませること」と、②の「自分との関わりの中で読み深めること」が相互に作用することによって学習者を古典学習へと導き、作品を読み深めるための仕掛けとなっている点である。入門期の古典学習教材として特に「竹取物語」には、そのような仕掛けがなければならない。そして、2つ目に学習活動を通して「ことばの力」を付けることを目標としている点である。

また、それとは別に、興味・関心を高める導入やワークシートの開発などいくつかの工夫も見られ、これらの工夫によって「竹取物語」の学習が、学習者にとってより学びの深いものになっていることを考察することができた。

(3) 第三章 現行中学校教科書における「伝統的な言語文化」教材の考察

第三章では、東京書籍・三省堂・学校図書・教育出版・光村図書の各出版社の国語教科書に掲載されている「伝統的な言語文化」教材を調査し、「伝統的な言語文化」教材の中の、同学年同一古文教材に焦点を絞って、「学習の手引き」の設問内容から「古文を読む力」を考察した。対象となったのは、「竹取物語」「平家物語」「徒然草」「おくのほそ道」の4教材である。考察に際しては、先行研究に基づき古典学習能力表を作成した。これは幾田伸司氏、村井真理子氏、茂木俊伸氏、その他5名の「小学校古典カリキュラム試案」⁴をもとに、佐藤幸代氏の「平成20年度版学習指導要領における小学校低学年から中学校3年生における古典学習能力表（試案）」⁵を参考にして、筆者が「音読・朗読」「語句の意味の理解・文章の解釈」「自分の考えの形成」「読書」という観点から作成したものである。「伝統的な言語文化」教材によってどのような「読む力」を付けるべきなのか、一つの指針となるものができたことは成果であった。それによって活発な言語活動や工夫のある発問を仕組んでいけば、学習者の興味・関心を育て、学びを深めて、「古文を読む力」を単元全体の学習活動において付けていくことができると考える。

古典学習能力表の分布を概観すると「音読・朗読」「語句の意味の理解・文章の解釈」を中心に活動が図られており、「自分の考えの形成」は3年の「おくのほそ道」に偏っていた。「自分の考えの形成」に

⁴ 幾田伸司氏、村井真理子氏、茂木俊伸氏、その他5名 『鳴門教育大学授業実践研究』第10号（2011）「小中の連続性をふまえた小学校古典カリキュラムの開発」において発表された「小学校古典カリキュラム試案」をもとに作成している

⁵ 佐藤幸代氏 奈良教育大学教職大学院研究紀要『学校教育実践研究』に掲載された「中学校国語科における新しい古典教育の方向性」において発表された、「平成20年度版学習指導要領における小学校低学年から中学校3年生における古典学習能力表（試案）」を参考に作成している

についても、各学年で段階的に付けていくべきではないかと考える。また、各社教科書の教材を調査し、指導の方向および教科書による差異を捉えることができたのは、使用する教科書だけにとらわれない教材の見方をもたらし、今後の「伝統的な言語文化」の学習の指導に生かすことができるという点でも大きな成果であった。

(4) 第四章 中学校「伝統的な言語文化」教育の実践と検証

第四章は、実験授業による研究と位置付け、教科書から各学年一教材を選び、第三章までの考察に基づいて指導案を作成し、授業による研究を行なった。教材については文章の種類が異なるものを選び、言語活動については生徒の実態や各教科・領域との関わりに応じて選ぶよう配慮した。教材名、単元名、授業に取り入れた言語活動は以下の通りである。

	教材名(学年)	単元名	言語活動
(1)	「徒然草」(2年)	「徒然草」人間ウォッチング	新聞づくり
(2)	「伊曾保物語」 (1年)	「伊曾保物語」のことを小学生に紹介してあげよう	劇化
(3)	「おくのほそ道」 (3年)	「おくのほそ道」おすすめスポットを巡る旅のガイドブックを作ろう	ガイドブックづくり

第一章で示した基本構想に基づき、授業を行なった。基本構想は次の通りである。

- 1 ワークシートを工夫し、学習過程を示すことによって一人で学べる環境をつくる。また、複数の教材を準備し、学習者が興味・関心によって選択することで、学習への動機づけを図る。(個別化)
- 2 主体的、積極的に、学習者自らが課題を解決していく過程で、内容を理解し、読み深められるようにする。(活動化)
- 3 学習者個々の考えが深まるように意見交流の場面を設ける。(協同化)
- 4 学習を創造的なものとし、学習を通して思考し、読み深めたことを、表現させる。(創造化)
- 5 基本(モデル学習)→応用→発展へ、言語活動を構造化する。学習のゴール・イメージを持たせるために、モデルを示す。(発展化)

検証するにあたっては、生徒作品や、ワークシート等を材料として、分析・考察を行なった。本研究における実験授業は、その単元目標を概ね達成できたと考える。特に(2)(3)の授業については、勤務校であることや、少人数であることから、個人の学びをたどれたことが有意義であった。

4 まとめ

(1) 研究の成果

本研究における実験授業は、その単元目標を概ね達成できたと考える。また、課題解決型の言語活動を位置づけたことによって、学習者が生き生きと活動し、作品を読み深めることができた。「伝統的な言語文化」の授業において、「伝統的な言語文化」に親しませ、「ことばの力」をつけていくためには、言語活動を取り入れた授業づくりが有効であることを、本研究を通して検証することができた。

言語活動によって、子どもたちは意欲と主体性をもって学習に参加し、「伝統的な言語文化」の作品内容を読み深めていった。また言語活動を通して、作者や登場人物の生き方や考え方や、学習者自身の生き方や考え方が関わっていった。言語活動によって学習者自身の思考をくぐらせる、その関わりこそが、生涯にわたって「伝統的な言語文化」に親しむ素地をつくっていくことを、学習者の学びから見取ることができた。

そして言語活動によって学習者が主体的に活動するとき、社会において生きてはたらく「ことばの力」を真に自分の力とすることができる。そのためには、外に向かって広がってゆく、具体的な実の場を設定することや、明確なゴール設定が不可欠であると言える。

本研究において実践した言語活動は「新聞づくり」「劇化」「ガイドブックづくり」だけであるが、言語活動を取り入れた「伝統的な言語文化」の授業づくりには多くの可能性がある。今後、教科書には載っていない教材を開発することも含め他教材においても、研究・実践に取り組んでいきたいと考えている。

「伝統的な言語文化」の授業において、学習者が生き生きと活動し、作品を読み深める課題解決型の言語活動を位置づけることは有効である。言語活動を取り入れた授業づくりによって、「伝統的な言語文化」に親しませ、「ことばの力」をつけていくことができると、本研究を通して検証することができた。

(2) 今後の課題

本研究の課題を挙げる。

1点目としては、言語活動によって獲得される「ことばの力」について、詳細に分析し、論述することができなかった点である。単元において、どのような「ことばの力」をつけるのかという明確なねらいを持つことは重要である。目の前の子どもに付けるべき力を明確にすることと、その力をつけることができたかという見取りが十分ではなかった。

2点目は、様々な言語活動について、その可能性を考察できなかった点である。前述した通り、言語活動を取り入れた「伝統的な言語文化」の授業づくりについて、引き続き研究・実践に取り組んでいきたいと考える。

(3) おわりに

本研究を通じて、学習者が生き生きと学ぶことのできる、言語活動を取り入れた「伝統的な言語文化」の授業の有効性を明らかにできたことは、これからの様々な実践において生かすことのできる柱となっていくと考えている。2年間の長期にわたる研修の機会を与えていただいたことに感謝するとともに、今後の授業実践を通して、本県の国語科教育の発展のために力を尽くすことが自分の責務であると感じている。

参考文献

- 植垣節也『古典解釈論考』昭和 59 年 6 月 和泉書院
- 大村はま『大村はま国語教室 3 古典に親しませる学習指導』平成 3 年 7 月 筑摩書房
- 森谷留美子『国語科新単元学習による授業改革⑦ 表現する自己を育てる』平成 11 年 2 月 明治図書
- 浜本純逸『<国語科新単元学習論による授業改革 1> 国語科新単元学習論』平成 9 年 8 月 明治図書
- 片桐洋一・福井貞助・稲賀敬二『日本の古典を読む⑥ 竹取物語・伊勢物語・堤中納言物語』平成 20 年 5 月 小学館
- 樺山敏郎『実践ナビ！言語活動のススメ モデル 30』平成 25 年 9 月 明治図書
- 渡辺春美『戦後における中学校古典学習指導の考究』平成 19 年 3 月 溪水社
- 遠藤瑛子『ことばと心を育てる—総合単元学習—』平成 4 年 7 月 溪水社
- 田中宏幸・坂口京子『文学の授業づくりハンドブック 第 4 巻—授業実践史をふまえて—中・高等学校編』平成 22 年 3 月 溪水社
- 高木まさき『国語科における言語活動の授業づくり入門 指導事項の「分割」と「分析」を通して』平成 25 年 4 月 教育開発研究所
- 水戸部修治『「単元を貫く言語活動」授業づくり徹底解説&実践事例 24』平成 25 年 11 月 明治図書
- 渡辺春美『小学校国語科 教室熱中！「伝統的な言語文化」の言語活動アイデアBOOK』平成 24

年 12 月 明治図書

- 高木展郎『「新学習指導要領」実践の手引き・6 各教科等における言語活動の充実—その方策と実践事例—』平成 20 年 11 月 教育開発研究所
- 横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校『思考力・判断力・表現力等を育成する指導と評価Ⅳ 言語活動を通して学習意欲を高める授業事例集』平成 26 年 3 月 学事出版
- 広島市教育委員会『言語活動実践ガイド—思考力・判断力・表現力を高める「ひろしま型カリキュラム」—』平成 23 年 6 月 ぎょうせい
- 富山哲也『<単元構想表>が活きる！中学校国語科 授業&評価GUIDE BOOK』平成 25 年 8 月 明治図書
- 全国大学国語教育学会『新たな時代を拓く 中学校・高等学校国語科教育研究』平成 24 年 12 月 学芸図書
- 日本国語教育学会『豊かな言語活動が拓く 国語単元学習の創造 I 理論編』平成 22 年 8 月 東洋館出版社
- 加藤郁夫『日本語の力を鍛える「古典」の授業』平成 22 年 9 月 明治図書
- 田中洋一『中学校国語科 国語力を高める言語活動の新展開〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕編』平成 21 年 6 月 東洋館出版社
- 田中洋一『中学校国語科 新しい教材と視点で創る古典の授業 伝統的な言語文化の享受と継承』平成 22 年 4 月 東洋館出版社
- 半田淳子「学習指導要領の改訂と小中学校の国語教科書が抱える課題」平成 25 年 3 月 31 日 『国際基督教大学紀要』第 55 号
- 佐藤幸代「中学校国語科における新しい古典教育の方向性」平成 23 年 3 月 31 日 奈良教育大学教職大学院研究紀要『学校教育実践研究』第 3 巻
- 中嶋真弓「小学校・中学校の古典学習の系統的指導—古文を中心に—」平成 25 年 3 月 14 日 愛知淑徳大学教育学会 『学び舎—教職課程研究—』第 8 号
- 住原久美子 「古典学習受容の実態：『徒然草』教材の場合」昭和 55 年 11 月 4 日 広島大学教育学部光葉会 『国語教育研究』26 中号
- 原藤芳明 「中学校の新しい古典学習—総合的な学習『平家物語』から—」平成 17 年 5 月 21 日 『全国国語教育学会発表要旨集』
- 加藤郁夫 『日本語の力を鍛える「古典」の授業』平成 22 年 9 月 明治図書
- 東京書籍「新しい国語 1」「新しい国語 2」「新しい国語 3」
- 教育出版「中学国語 1 伝え合う言葉」「中学国語 2 伝え合う言葉」「中学国語 3 伝え合う言葉」
- 学校図書「中学校国語 1」「中学校国語 2」「中学校国語 3」
- 光村出版「国語 1」「国語 2」「国語 3」
- 三省堂「中学生の国語一年」「中学生の国語二年」「中学生の国語三年」